

未来の渋谷を動かすローカルアクションマガジン

# 渋谷カッナビ

TAKE  
FREE

2026

特集

## 僕たちの ローカルアクション

*This is  
our local action style!*



# 特集：僕たちのローカルアクション

## 座談会

06 大学生たちはいま地域をどう見ているの？

### 地域で活動する若者たち

10 子どもたちの“やりたい”を叶えるところって滅多にないから——— 上野晴紀さん、西沢颯人さん

11 ボランティアというより、休息の時間です——— 若松かりんさん

12 ボランティアって、“この人のため”っていうのが明確なので、人の温かさを伝えられるんじゃないかな——— 石原穂乃香さん

13 地域活動は、ただ生活しているだけでは出会わないものと出会う、非日常的な体験だと思います——— 鈴木遥香さん

14 大学というコミュニティがあるから、社会に向き合える——— 聖心女子大学 有志団体 EyeCiel

15 やっぱり回数重ねると、子どもたちの反応が全然違ってくるってすごいと思う——— 笹塚小学校「ワクワク水曜塾」

16 変わり続けるまちだけれど、変わらないものもたくさんある——— 秋山愛美さん、柴山鈴花さん

17 自分とはバックグラウンドが違う人とかがわれるのは楽しい——— 川崎文華さん

## 座談会

18 大学も応援しています！

杉原真晃さん（聖心女子大学現代教養学部教育学科教授）

秋元みどりさん（青山学院大学シビックエンゲージメントセンター助教）

遠藤晃弘さん（東海大学観光学部観光学科専任講師）

### 海外の若者たち

22 イタリア・アレッサンドリア市の若者団体「Yggdra」  
イグドラ

### 地域で育ち、ふたたび地域へ

24 だんだんと役目は変わったけど、ずっと生活の一部です——— 渡貫健太さん

25 僕たちが離れても、プレーパークはそこにあった。だから、また戻ってこられた——— りよーまさん、みつき～さん、あおきさん

26 明治神宮の森に毎年通い続けたから、変わるものと変わらないものが見えてくる——— 杉山子竜さん

27 “部活”がまちに開いたら？——— 田丸尚稔さん（一般財団法人渋谷区スポーツ協会）

30 ローカルアクションのコツ [若者と地域編]

31 編集部から

## 『渋谷ナビ』宣言

『渋谷ナビ』は、渋谷にかかわる方々の地域活動にローカルアクションを応援する冊子です。

「ローカルアクション」とは、住民が地域で行う自発的な活動のこと。

渋谷区内では、すでに数々のローカルアクションが行われていますが、

これからもどんどん増えてほしい。

そして、もっと広がってほしい。

たくさんの人にその歓びを知ってほしい。

なぜなら、ローカルアクションは地域の温かなつながりをつくるものだから。

そして、その温かいつながりが、

渋谷の未来を動かしていくものだと思ってるからです。



# 僕たちのローカルアクション

渋谷には若者がたくさんいます。

中には地域活動に参加している人たちがいます。

それは住民だけでなく、通学のために渋谷に来る若者たちの中にも。

さらに、活動に参加するために渋谷に通う若者もいます。

いま若者たちは地域をどう見ているんだろう？

活動の中でどんなことを考えているんだろう？

大学生を中心に取材した10代後半～20代前半の若者たちの

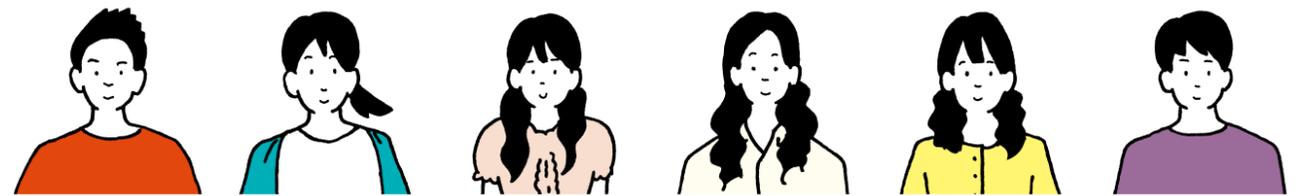
さまざまなローカルアクションに、未来の渋谷を動かす力を感じてみませんか。



# 大学生たちは いま地域を どう見ているの？

地域活動に若い人たちは参加していない？それはどうしてなんだろう？  
東海大学観光学部観光学科で遠藤晃弘先生\*のゼミに所属する学生たちは、  
ゼミでいろいろな地域を訪れています。  
彼らはどんなふうに見ているんだろう？聞いてみました。

\*遠藤先生は18ページに登場します



- 小林秀光さん** 観光学科3年生。生まれも育ちも東京・大田区。「海外旅行が好きなので、自分が味わった感動を他の人にも味わってもらえるような仕事をしたいです」
- 千葉祐希乃さん** 観光学科4年生。大阪生まれ。中学生から神奈川県・川崎市。「高校の頃からホテルで働きたいと思って観光学部に入り、バイトもホテルで、就職もホテルですごい楽しい!」
- 吉野凧紗さん** 観光学科4年生。生まれも育ちも広島。「大学1年生の時からずっと放課後児童クラブでアルバイトしています。子どもが好きなので教育旅行を考えたいから旅行会社に就職します」
- 早川ひかるさん** 観光学科3年生。生まれも育ちも東京・江東区。「水泳が大好きなので水泳にかかわる仕事をしたかと思っていましたが、違う仕事もしてみたいと思っています」
- 稲田彩乃さん** 観光学科3年生。生まれも育ちも東京・墨田区。「大学の学びを通して就職先を決めたいので、ゼミのいろいろな活動に参加するようにしています」
- 高橋暖人さん** 観光学科3年生。生まれも育ちも東京・大田区。「地域を支えられるような事業をやりたい。地域をもっと活性化すれば日本の観光業も活性化すると思います」

## 地元で地域活動をしていた経験はある？

**高橋** 小学校の頃はお祭りとかは友達と行くもので、地域活動だと思って参加していませんでした。遊び感覚で、中学もその延長。高校では部活をしていたので、全然参加できる状況じゃなかった。大学生になったいまはより距離が遠くなった気がします。

**稲田** やっぱり中学校高校になると、部活とか塾とかに通い出して忙しくて……

**早川** 私は小中高の頃は地域の活動に参加したことはほとんどなかったです。小学校の企画で商店街のお手伝いに行ったりしたことはあったんですけど、小さい頃から水泳をやっている、夜に練習があるので行ける時間がなかったんです。地域に目を向け始めるきっかけは大学のゼミです。

**吉野** 私は中学の陸上部で地域のごみ拾いをやらされたりしましたけど、自主的にやることはなかったですね。高校は部活が朝から晩まであって、地域とは全くかわっていませんでした。このゼミに入ってからかかわるようになってきた感じがします。

**千葉** 私は中学の頃にお父さんの転勤で川崎市に引っ越してきたんですが、市の月例マラソンに家族で参加したり、夏休みは近くの公園で朝のラジオ体操にお父さんとたまに参加して

たりはしていました。でも、高校に入ったら遠いし、部活も忙しいし、高校時代はコロナ禍だったこともあったので、地域活動をやっているかどうかもわからなかったです。

**小林** 僕は、実家が自営業でお父さんがPTA会長だったこともあって、地元のイベントには結構参加していました。お神輿を担いだり、家業の事務所がお祭りの休憩所になってたりしましたし、商店街では阿波おどりやサンバ・カーニバルもありました。神社のお祭りや節分の豆まきにチャリを飛ばして行ったり来たりしましたね。中学や高校になると部活三昧の日々で、地元にはあまりいませんでした。

## 地域にかかわる若者って珍しい？

**千葉** 遠藤ゼミ以外の友達に「こういう活動をやってるんだよね」と話すと、けっこう珍しいがられる。「えー、そんなことやってるんだね」みたいな。

**吉野** やっぱり周りでも積極的に地域活動に参加している子がいいですね。「大学生って人生で一番楽しい時期でしょ」みたいなことを言われて(笑)。やっぱり遊びたいとか、自分のやりたいことをしたいという人が多いし、ボランティアだって言うし「なんで無償で参加したの？アルバイトでお金を稼いだほうがいいじゃない」とか……「すごいね」とか言われるよね(笑)。

## みんな言われる(笑)。

**吉野** こういう活動があること自体を知らない若い子が大多数じゃないかなと思いますね。

**千葉** 就活でも「学生時代、どういうことをやってたんですか？」って聞かれて、「地域活動をやったんですけど」って言うと、「面接官からも「すごいね」とか、すごく珍しい感じが言われる。同年代だけじゃなくて、大人の人からも地域にかかわることは珍しいって言われますね」。

**早川** あと私が思ったのは、私の親世代も地域活動に参加する人が少ないってことです。その上の世代は多い。自分の親がやっていないからやらない、というのが一番大きいんじゃないかな。

**稲田** 私たちは遠藤ゼミに入ってから機会をももらっているからこそ活動できるんですけど、普通の大学生として過ごしていたら、まず自分から参加しに行くこともなかなかないし、そういう活動があることも知らないですよ。

**高橋** 携帯ばかり見てますからね、歩いている時も通勤通学している時も。地域の行事なんて携帯には載ってないじゃないですか。だから、みんな知らないんだと思う。有名な行事はSNSでも見られるけど、地元のお祭りなんて出てこない。まちの掲示板なんて見ないんですよ。  
**小林** たまに散歩している時に、花火大会やお祭りの案内とかを掲示板で見ることがあるけど、それくらいしか見てないね。

**早川** 地域のことを自分で調べようとしないからね。自分たちの情報源も狭すぎるし、情報に接する場所も少ない。だから、参加のハードルもたぶん高い。

**千葉** 地域の魅力発信なら渋谷のラジオがありますよね。でもやっぱり、貴重な機会ではあるけれど、ラジオを聴くっていう若者はあまりいないかも。ラジオがあることすら、私も知らなかったし……。

**吉野** あと思うのは、自分もそうなんですけど、大学生ってもう一ヶ月先、二ヶ月先の予定を決めていたりするんですよ。情報をゲットするのが遅いと、行きたいと思っても参加できないし、私たちは一度でも地域に参加した経験があるから、「次はあれに行こう」ってなるけど、なんにも参加したことがない人は参加した成功体験の感覚がないから、**どういうものなのか、なにを得られるかわからない状態では参加しようってならないのかも。一回参加したら二回、三回とすぐ参加できるんですけどね……。**

**高橋** 僕はゼミで行った西表島にまた行きたいなって、友だちを誘っちゃったよ。

**吉野** 友だちに誘われたら行くかもしれないけど、「楽しかったよ、すごい」で終わっちゃうことも多いよね。

**地域とかかわってきて、どう思いました？**

**吉野** 私は人とかかわりがすごい好きなんですけど、活動には直接関係なくとも、そういうかわりのなかで知る新しいことで自分が広がりました。これまで消極的だったことに対して、自分から積極的に参加するようになりましたね。自分からボランティアを探して参加するようになって、いろいろな人とかかわれて新しいつながりができたりするのがすごく楽しくて充実していて、良かったなっていう感じです(笑)。

**千葉** 私も同じ。コミュニケーション力がついたこともそうですし、新しい場所に行くことへの抵抗もなくなりました。ボランティアに一人で行くことに抵抗もなくなったし、**就活に役立っただけじゃなくて、自分の身にすごく役に立った**と思いますね。

**吉野** そうね。「やってみよう」「やったらなんとかなる」みたいな……。

**早川** 私はもともとお喋りが好きで、あまり抵抗はなかったんですけど、それでもやっぱり活動をすればするほど自分が明るくなった気がします。経験を積み重ねたことによって、**自信もつきましたし、毎日が充実しているように感じます。**

**小林** 僕は逆にコミュニケーションが得意なほうじゃなくて、話すのが下手だと感じていたんです。でも、ゼミを通じて積極的に自分から行動することが求められて、**自分が動かないと、なにも始まらないからやってみよう、**って地域の活動をして人とお話ししているうちに、だん

**稲田** 大学生になって運営側としての活動を通して、参加者の視点と主催者側の視点の違いや地域ごとによる違いを感じています。

**吉野** 昔は地域って地域内のつながりが強くて、自分の住んでいる地域じゃない地域の活動に参加させていただと、すごく温かく迎えてくれますし、**思ったよりも受け入れ体制がある。**他の地域の人も受け入れる温かさがあるなとイメージが変わりました。

先輩二人と渋谷区富ヶ谷のパンフレットづくりで地域を歩いた時、先輩たちは二年間富ヶ谷で活動してきたこともあって、町会長さんたちと「お久しぶりです」って会話していて、**地域に住んでいなくてもそういう顔見知りの関係を築けるとい**うのが衝撃的でした。

**千葉** 私もゼミで小学校のお祭りのボランティアに二年続けて参加したんですけど、一年前に一回会っただけなのに、地域のみなさんが覚えててくれたんです。学生の参加が珍しいのもあるのかもしれませんが、うれしかったし、参加してよかったなって思うし、いい地域活動だなと思いました。**地域活動に参加している方々がつな**がりをすごく大事にしている気がする。だからこそ、覚えててくれるんだなって感じます。

**早川** 私も地域の人たちに受け入れ体制が意外とあるなって感じています。お話を聞く時も、部外者がズケズケ入り込んでるんじゃないかなって不安だったんですけど、なんでも答

だん慣れてきたのかなと思います。

**地域について思うことはある？**

**早川** ゼミで活動し始めてから自分の**地元**の活動にも参加したいなと思っ、チラシや地元の看板、掲示板とかを見始めています。そもそも地域活動がダサいみたいなイメージも私は持っていないですし、**みんな意外とよく参加している**なというイメージのほうが強いです。私の友だちもよく参加していますし、コロナ禍以降、地域に新しいお店や古民家を活用したカフェとかがここ一、二年ででき始めていて、目に見えて活動してる人がいるなと感じます。

**千葉** 地域活動をしている人の年齢層はば、かつて参加していた市のマラソン大会やラジオ体操にもおじいちゃん、おばあちゃんしかいなかった。マラソン大会の運営側も年齢層が高めの人が多くて、いま運営する側に回ってみて、続けることの難しさとか……昔はただ楽しくて参加してたけど、**若い人がいないと、この先続けていけるのかな**っていうことは考えてしまいますね。

**稲田** この前、掲示板に「神輿の担ぎ手募集」って貼ってあって。地域の高齢化が進んでいるのかな、って思います。それと最近、うちの近所に外国からの観光客がすごく増えていて、**地域って地域内の関係だけじゃなく、外部との関係もある**んですよ。

えてくれるし、嫌な顔せずにはわたりやすく説明してくださって、すごく驚きました。

**高橋** 本当にどこの地域もアットホームな感じがして、それが個人的にはすごく好きです。ある時、先輩が焼き鳥を全部落としちゃったんですけど、その地域のお父さん方が「なにやってんだよー」みたいな感じでいい雰囲気にしてくれた。怒るんじゃない、すごく優しく声をかけてたのも、**すげえアットホーム**だなあと思ったし、沖縄では「本当、お前ら息子たちみたいだよ」みたいなことを言われて、なんかうれしかった。「家だな、ここ」ってすごく思いました。

**稲田** 岩手県釜石市で二泊三日の活動をした時、海も川も山もある環境で、私たちが知っている地域とは違っているところもあったし、同じところもあって、**地域にもいろいろな特徴と**いうか、**色**があるんだなって思いました。

**小林** そうですね。地域の特色はそれぞれあるんですけど、ゼミ合宿で沖縄の竹富島に行った時に聞いた、「竹富で起こっている問題は、他の地域にも起こっている」という言葉がすごく印象に残っているんです。それを僕が地元で例えてみたら、確かに文化を継承する人がいなかったり……。**地域ごとに特徴はあっても、根本的なところは一緒**なんじゃないかな、と思います。

**地域にかかわったことは役に立っていると思う？**

**小林** 地域って身内以外の人とかかわりやすいですね。小さい頃は公園でよくサッカーとかやっていた、子どもたちも周囲にたくさんいたし、話しかけてくるおじさんたちもいたんですけど、**いまままたまに公園に行くと、子どもが全くいない。**いても一人でサッカーの自主練習をしているとか……外でもスマホを見ている子どもたちも増えてるし、知らない人が話しかけると逃げたり……それってやばいと思っちゃうんですよ。**人と地域のかかわりがちょっと少なくなったように**感じます。

**高橋** 確かに公園では遊ぶ子たちは減ってるけど、お祭りも混んでるし、子どもたちもいるし、家族連れもいる。逆に僕は変わってないとも思うんですよ。昔からあるお店があると、「あ、懐かしいなあ」って思うし、「ああ、変わってねえなあ」ってなるよね。



# 地域で活動する 若者たち

渋谷区を見渡していると、いま、あちこちで活動する若者たちがいます。彼らはどんな活動をしているのか。どうして活動を始めたのか。地域のなかで体験したこと、考えたこと、そしてこれからのこと。

子どもたちの“やりたい”を叶えるところって滅多にないから



代々木にあるフリースクール「みんなのプロジェクト学校」(以下、みんプロ)で、毎週金曜日10時から14時まで子どもの遊び相手ボランティアをしている上野さんと西沢さん。大学ではスポーツマネジメントを学ぶ同級生で、二人とも埼玉在住で大学も埼玉。なのに、毎週代々木みんプロにやってくる。

みんプロにかかわり始めたのは上野さんが先。「代々木高校3年生の時、先生に勧められてみんプロの『夢の運動会』にボランティアに行ったのがきっかけです。おもしろそうだなって思って。やっぱり滅多にないじゃないですか、子どもたちがやりたい運動会。っていう夢を叶えるなんて」。西沢さんは、

大学に入学してすぐ、上野さんから「ササハタハツファームのマルシェがあるからこない?」と誘われて、「おもしろそうだから『行きたい』って言って、子どもたちがやりたいという射的やおもしろいの実現を手伝いに来たのがきっかけ。その後、ずっとみんプロにかかわり続けている。上野さんはどうして知り合ったばかりの

西沢さんを誘ったの? 「なんか、やりたそうだったから笑」。西沢さんは参加してどうだった? 「ただただ楽しかったですね。その夏はキャンプにも参

加した。「そして、いまも楽しい。ずっと楽しい笑」。みんプロは、子どもたちの自主性を尊重している場。二人の来る日は子どもたちがなんでもいから遊べる日で、彼らは子どもたちと一緒にただ遊ぶ。カードゲームをしたとかボール遊びをしたとか、子どもたちがやりたいことを一緒にやる。「楽しいのはもちろんですけど、長くかかわっていると、一人ひとりの成長を見られるんですよ。それもおもしろいです。やっぱり喧嘩もする。でもちゃんと話し合って自分たちで解決しようとしてたり、いろんなところで成長を感じますね」と上野さん。イベントごとと大学の友だちも誘う。「このいいところは、自由なところ。子どもたちがやりたいことを考えて自分でできるところってあんまりないと思う」と二人は言う。自分の子ども時代にもこういう環境が

うえのはるき 上野晴紀さん[右]  
尚美学園大学2年生。埼玉生まれ埼玉育ち。小2からモータースポーツを始め、現在はチームに入ってF4で活躍中。  
にしざわはやと 西沢颯人さん[左]  
尚美学園大学2年生埼玉生まれ埼玉育ち。上野さんとともに大学ではスポーツマネジメントを専攻。子どもが大好き。

あつたらな、とも思うし、子どもたちがやりたいことを実現できる環境をつくっている大人も素敵だなと思ってる。ここでの活動は「勉強になってます」と彼らは言うけれど、それは教科書的な勉強ではなくて、じわじわと自分の中になにかが入ってきている感じなんじゃないのかな。じゃあ、一年前の自分とはちょっと違う?と聞くと、二人は声を揃えた。「違うはずですよ!」(笑)。(インタビュー:2025年9月19日)

## ボランティアというより、 休息の時間です

「笹塚十号通り商店街にある『笹塚十号のいえ』ではもう『毎週木曜日はかりんちゃんネイル』が定着していて、開始一時間前から待っている人もいれば、「いつもの、お願い」という人も。笹塚十号のいえとのかかわり始めは大学の授業だったけれど、「もっと深くかかわりたいなって思って」個人的に来るようになり、木曜日はだいたい14時から18時半、他の日もイベントがあれば顔を出す。「地元にいるより笹塚にいることのほうが多いですね(笑)」。かりんさんは、小さい頃からガールスカウトに参加しており、中学3年生のあるイベントの時、子どもたちにお手玉を教えている祖母がどんな明るくなっていく様子を見たことから、「誰かの能力を活かすってすごく素敵だなと感じた」という原体験がある。だから、笹塚十号のいえでも「ハーモニカが得意な方が定期的に演奏会をされていたりすることにすごく共感して……。私

自身もネイルで気分が高まるし、ネイルをするとみなさんの表情もすごく明るくなるのがうれしい。ネイルを乾かす間はおしゃべりの時間。かりんさん自身も気分が落ち込んでいる時にここで人々と会うと元気になるのだとか。「ボランティアというより休息。笑顔になって帰れる場所っていう意味で、第二の実家笑)。みなさんが優しいから助けられているというのが本当に大きいです」。

一方、かかわりが深くなるとスタッフの苦労も見



わかまつ 若松かりんさん  
聖心女子大学教育学科3年生。練馬区生まれ練馬区育ち。ガールスカウトやインキュベーションオフィスでの長期インターンもしつつ、笹塚十号のいえでネイル施術のボランティアを行っている。「他の区よりも新しいことにチャレンジしている渋谷区に興味があって、区とのかかわりも深い聖心女子大学を選んだ。「大学受験の時に使ったノートには、「地域づくり演習を受講したい」とか書いてある(笑)」。卒業研究では、サードプレイスの重要性やビジネスモデルの構築について書きたいという。

えてくる。時には利用者同士のいざこざの場面にも遭遇することもある。「みんなそれぞれの価値観や正義があるからこそ衝突してしまう。だからといって受け入れられないものを強要しても多様性にはつながらない。そういう場をボランティアで続けることは精神的にもしんどい人もあると思うので、将来的には地域活動や社会貢献にかかわりたい人がより身近にチャレンジしやすいビジネスをつくれたらなって考えています」。お母さんからは、「いったん就職して、社会で採まれてきなさい」と言われているけれど、「いずれは『練馬版十号のいえ』をつくりたいなって思っています」。(インタビュー:2025年9月18日)



ボランティアって、「この人のため」って  
 いうのが明確なので、人の温かさを伝え  
 られるんじゃないかな

「いま思えば、『しぶっこ』は後輩たちのために立ち上げたって思います」。たまたま取ったサービスティアの授業で渋谷区こどもテーブルの存在を知り、大学のボランティアセンター（現シビックエンゲージメントセンター）のコーディネーターから「同じような関心がある学生と話してみない？」と誘われた。当時はちょうどコロナ禍の真っ只中。出会った後輩三人は、「入学してからずっとコロナ禍で、思い描い

すが、当時はそれ以上に、後輩たちの居場所づくりをしてあげたいって思った」。当時、渋谷区にはこどもテーブルが90ヶ所ほどあったが一般的な認知度は低かった。本当に必要な人に届けられていないのではないかとすれば、自分たちでできることはな

っていたサークル活動もまともにならなくて、エネルギーがすごくあり余ってる感じだったんです。子どもたちを助けたいのはもちろんで



いしはらほのか  
**石原穂乃香さん**

社会人3年目。茨城生まれ。2021年青山学院大学3年生の時に後輩と「しぶっこ（渋谷こどもテーブルボランティア愛好会）」を立ち上げる。「確か私の卒業時には70人ぐらいたかフォロワーはいなかったのに、こないだ見てみたら800人ぐらになって、わーお！ 続いているんだ、って思いました（笑）。現在はUI/UXデザイナーとして仕事をかたわら、社会人仲間とともに里山づくりに携わっている。



しぶっこ  
[https://www.instagram.com/shibukko\\_aoyama/](https://www.instagram.com/shibukko_aoyama/)

も何回もこどもテーブルを企画した。石原さんも後輩たちももう卒業したが、しぶっこはいまも続いている。「いや、本当にびっくりですよね！」。続いている理由はなんだと思う？「ひとつはSNSという学生が好きなメディアであること。でも潜在的な理由は、学生たちも地元の人と話したり、交流できることの温かさやつながりに価値や元気をもらってるということだと思います。根源的な社会問題に対して、ちゃんと社会のためになっているということもひしひし感じられるし」。石原さん自身も当時は一人でオンライン授業を受ける毎日。「おじいちゃんおばあちゃんとか子育てママさんとか、学生とかかわりがない世代の人たちとかかわれる機会が本場になかった。そういう人たちと出会うと、地元に戻ったような安心感、おもしろさ、新鮮味があって、自分も孤独から救われてるなって」。

社会人になってからはしぶっこも渋谷の地域と触れ合う機会はないけれど、いまは社会人仲間とともに里山づくりに取り組んでいる。「つながりの温かさや人の手でつくられたものや、日本の風景を未来の子どもたちへ残したいと思っています。これから都心集中はますます進み、子どもたちのほとんどは都会で育つでしょう。都会は効率的で無駄がなく便利ですが、間がないので孤独になりやすいともいえるのではないのでしょうか。子どもたちにも人間らしい営みを通して、つながりや温かさを感じながら暮らして欲しい。渋谷区で育った子どもたちこそ里山に行って、目一杯、感性を育ててほしいなと思っています」。

インタビュー：2025年9月19日

地域活動は、ただ生活しているだけでは  
 出会わないものと出会う、非日常的な  
 体験だと思っています

人の温かみというか、人間らしさみたいなそのまのちの特徴が強く現れるところだと思うから、そのまのちの魅力みたいなものも引き出して

猛暑の9月。笹塚の住民から草むしりの依頼を受けた一般社団法人TENNISHIPアソシエーションに協力して、青山学院大学シビックエンゲージメントセンターの主催する「笹塚プロジェクト」の学生チームが、二ヶ所に分かれて草むしりに汗を流していた。4年生の鈴木さんは昨年度から参加。高

トでは、月一回、笹塚十号のいえで野菜にまつわる簡単な食事を提供したり、手づくりの射的や輪投げゲームで遊んでもらったりする学生の自主イベントを定期的に開いている。「自分たちで考えた企画をするのが圧倒的に楽しいですね。そしてそれを楽しんでもらえるのがやっぱり一番うれしくてやりがいになっていと思う」。いまチームには4年生が二人、3年生が三人、1年生が二人。「同じ目的を持った人がいるのもいいし、向上心もあって積極性もある後輩からすごく刺激をもらっている部分もある」と鈴木さん。これから地域活動をやりたいという後輩がいたら、どう薦める？「そうですね。地域とかかわることではか見えませんが、非日常的な体験だなんて思います。自分の生活圏内だけではかかわることのない人とかかわるわけじゃないですか。それがどんどん継続していったら、常連さんとかに『また来たんだ、やってるね』みたいに言われるとすごくうれいしですし、新しいコミュニティに入れたうれしさもある。そういうのが楽しいって思えるような後輩の子がいたら、すごくおススメだよって言ってあげたいですね」。



にか解決できないか」と、大学では地域経済や地域活性化を学ぶことを選んだ。「早速でスタスタ歩いて地域とのつながりもなく、挨拶もない……そこが悲しいというか物足りないなってなるとなく思っています。地域って無機質なものじゃなく、



すずきはるか  
**鈴木遥香さん** [左]

青山学院大学経済学部現代経済デザイン学科4年生。千葉生まれ千葉育ち。「地元が好きなので地元を盛り上げたいと思って、就職は地域密着型の企業に決めました。地域に根差しながらよりお客様と近い立場で関わられるかなと思って」。

青山学院大学の笹塚プロジェクトの学生メンバーとともに。鈴木さんから時計回りに、星亮成さん(4年生)、荒川十嬉さん(3年生)、古川愛子さん(3年生)

インタビュー：2025年9月17日

## 大学というコミュニティがあるから、 社会に向き合える

日常の小さなことから環境問題・海洋問題に取り組みたいと結成されたEyeCiel。学内にコンタクトレンズの空ケースの収集箱を設置して回収し、コンタクトレンズメーカーに送るのが主な活動。「身近なことから環境問題を解決する一歩が踏み出せる。そういう貢献をかたちにしたいと思って先生に相談したら、『いま同じ思いを持っている人が何人かいるから、一回集まってみたら?』って言われて」と高橋さん。そこで清水さんと出会った。清水さんは小さい頃から水族館が好きで、海洋生物にプラスチックなどのゴミが影響を与えていることに心を痛めていた。清水さんはそうした課題に対して自分なりに活動したいと、ボランティアや社会貢献活動に定評がある聖心女子大学を選んだ。高橋さんは入学してから、大学が地域活動や社会活動に取り組みたい学生を後押ししてくれていることを知った。なにかきっかけがあれば、と考えていた大河さんはサークル募集で先輩たちの活動を知った。「二人でやるにはハードルがあると思えても、大学では受け入れ体制が万全なので、相談したらなにかしらの形にしてくれる。大学内だからこそ多くの人を巻き込めるのもあって実現化しやすいと思います」と高橋さん。清水さんも、「自分が住んでいる地域でも活動したいと思って調べたことはあるんですけど、やっぱり自分一人だと参加に勇気がある。でも、大学内なら友人もいるし教職員も信頼できるので、安心して実現しやすいのは確

かにそうなんです。実際それでこの活動を始めることができたのもすごく自信につながっています。大学というコミュニティを通じて、地域と協力してもっとよい活動ができるのではないかと感じつつあります。」

(インタビュー)2025年9月17日

### 聖心女子大学 有志団体EyeCiel

コンタクトレンズの空ケースを回収してリサイクルする有志団体として2023年から活動開始。現在、7名で活動中。  
清水ひまりさん [中央]  
EyeCiel代表。教育学科3年生。学内のボランティアサークル「はなはなSDGs」にも所属。  
高橋凛さん [右]  
国際交流学科3年生。  
大河まいさん [左]  
史学科2年生。



やっぱり回数重ねると、  
子どもたちの反応が全然  
違ってくるってすごいと思う

大学生が小学校に来て勉強をみてくれる「ワクワク水曜塾」は子どもたちも楽しみにしている様子。前半はプリントで勉強、後半は遊びと時間が分かれていくけれど、子どもたちは最初から遊びたい気持ちのほうが先行する。とはいえ基本は補習なので、学生たちはそんな子どもたちに寄り添って「ほら、プリントやろうよ」と促したり、一緒に遊びつつ子どものタイミングを待ったりしている。担当である副校長補佐の十一真先生はそんな様子を見守るのみ。終了後の振り返りでは、学生たちは「プリントをやるうっていう促し方をちょっと工夫しないといけないなと思った」「あんまり強く言うのはよくないなと思った」と省みたり、「子どもたちとカルタづくりをしたらどうだろう」と提案したりする。「プリントは二の次、三の次。遊びの時間にいままで一人だった子がみんなとやろうよ」と誘ったりする姿だって、普段じゃ見られない。みなさんがつくる雰囲気の中、その範囲で子どもたちもはめを外してきているなって感じます」と十一先生。年間を通じて同じ子どもたちと一緒に過ごすからこそ、子どもも学生も互いに馴染んでいく。学生たちは、「最初きっかけなかったのに打ち解けてくれるし、子どもたち同士もすごく仲良くなってる」「こちらが先生みたくにこうやりなさい」と言うのと、やっぱり向こう

も先生みたいな人って捉えてガードしちゃう。けど、年齢が近い友だちみたいな感覚でいると心を開いて

くれるのかなって思う」「回数を重ねると、教室に入った時の子どもたちの反応が全然違ってくるなってすごく思う」「子どもたちそれぞれ、だれかしらお気に入り

の学生がいるみたいで、遊んでって最初から来てくれる」「子どもたちって主体性があるから、なにかトラブルが起きた時でも、いい意味で放っておけるようになったかなと思う」「最初は子どもは保護対象だから自分がいっぱいしなきゃって思っていたけど、お友だちとして接しているんだという姿勢を持てた。」「距離が縮まった分、ちよっと舐められちゃうところもありはする。一応先生

### 中里晋三さん(青山学院大学シビック エンゲージメントセンター教員)から見て 子どもも学生も自然に変化していく

単発のイベントとしてボランティアにかかわる学生が多い中で、通年のプログラムはハードルが高いと思うのですが、それでもみんな来てくれる。トライアルの時から、子どもの接し方がよくわからない学生がやんちゃな子たちの受け止め役になっていく光景が見られ、「こういう子がこういう活躍の仕方をするんだ」という新鮮な驚きがありました。学生も「自分なりにかかわればいいんだ」ということを感じていく。それは結局、自分が居心地よく過ごすためにはどうすればいいのかを考えることにもつながります。時々、小学校の先生方では起こしえなかった子どもたちの変化が起こっているという話をうかがうと、すごく意味のある場だな、良かったなって思います。



### 笹塚小学校「ワクワク水曜塾」

毎週水曜日の午後、渋谷区立笹塚小学校で行われている小学2・3年生の補習クラス。学校での勉強に苦手意識のある子どもが学びの楽しさを実感できる場づくりに、学科も学年もバラバラな青山学院大学と聖心女子大学の学生たちが通年でかかわっている。左から、江島瑛人さん、櫻井哲さん、穂積葉奈さん(ともに青山学院大学)、加藤希泉さん(聖心女子大学)、山田陽奈さん、須田菜々子さん、古川愛子さん、甲斐凜音さん、川村悠花さん、大野緒巳さん(ともに青山学院大学)



として来てるので、ある程度一定の距離を保つことも気をつけながらできるようになってきたかな」などなど、変化も見て感じている。「仲良しになった子どもにも来たてね、って言われるとやっぱり会いたい気持ちになる」とか「授業のコマが空いているから」とか、続けている理由もそれぞれだけど、「笹塚に来ると安くておいしいご飯が食べられるんですよ! それが毎週楽しみで」という学生も。うん。それ、とっても大事!

(インタビュー)2025年10月20日

## 変わり続けるまちだけれど、 変わらないものもたくさんある

商店街やお店、行政やまちづくりから歴史・文化・芸術まで多岐に渡る視点で渋谷というまちに生きる人たちを取り上げるオンラインメディア「渋谷新聞」と、原宿表参道エリアにフォーカスした「原宿表参道新聞」。2025年に秋山さん、柴山さんがそれ



ぞれ編集長になってから、渋谷新聞は「渋谷のダイープを発信するメディア」、原宿表参道新聞は「原宿表参道の自分らしく表現できる街を体現するメディア」とコンセプトを刷新。表面的な情報を紹介するのではなく、もっと「普段見逃してしまうようなところに焦点を当てる」（柴山さん）。

最大の特徴は、両紙とも学生が中心となって大人メンバーと連携を取りながら、運営やライターを務めていること。「大学生・高校生・中学生がそれぞれの視点で考えて、学生だからこそ疑問を率直に投げかけられる。プロじゃないから慣れないし失礼もあるかもしれないけれど、緊張感の中で得られたその人なりの情報とか、そういう空気感だったからこそ話してくれたことが、取材内容や言い回しに出てくる。例えば単なるお祭りの開催レポートだったら他のメディアにだってできること。私たちにしかできないことって、そういう「人との対話」で、そこが他のメディアとはちよつと違うんじゃないのかなって思います」と秋山さん。

現在、ライターは全体で30人ほど。毎月メンバー

### 秋山愛美さん [右]

渋谷区生まれ渋谷区育ち。社会福祉学を専攻する大学2年生。高校1年生だった2020年に渋谷新聞の立ち上げに参加。2025年より編集長。「参宮橋の誇りは代々木ポニー公園だと思っただけで遊んでました」。

### 柴山鈴花さん [左]

原宿表参道新聞編集長。渋谷区生まれ渋谷区育ち。大学3年生で心理学を専攻。2021年に立ち上がった原宿表参道新聞に参加。2025年より編集長。「代々木公園のお祭りとかによく連れていってもらったし、小学生の時は虫がめっちゃ好きでバツタを採りに行ったり、いろんな大人と自然に囲まれて育ちました」。

が集まり、前月にアップした記事の閲覧数を確認したり、記事を読み合ったり、改善点を出したり、次の企画を出したり。ライター各自が持つまちに対する興味関心の在り処こそ、記事にしたい対象。だから、「おしゃやかなカフェの記事がアップされる日もあれば、町内会長への取材記事があったりとざっくりばらん」（秋山さん）。秋山さん自身は、「自分のまち、渋谷が大好き」で、中学、高校時代、一年かけて探究学習するテーマを「私の住むまち渋谷区」と定めて、中1から高2まで毎年違う切り口でレポートを書き続けたそう。「渋谷だったら毎日いるし、年によって自分がSDGsに関心があればSDGsを、政治に関心があれば政策系をと、いろいろ取り上げられますから」。一方、柴山さんは、文章を綴ることや写真を撮るのが好きで、「人が持っている思いをちゃんとキャッチアップして伝えるのが、ローカルメディアとしてできることであり、自分がしたいこと。発信できる環境があるならば、その環境と学生というステータスを活かしつつ、普段聞けないようなところにどんどん聞きにいく、思いを他の人に伝えていく。そこで輪が広がっていくば、めっちゃいいなと思います」と言う。

渋谷新聞 <https://shibuya-shimbun.com/>

原宿表参道新聞 <https://harajuku-omotesando-shimbun.com/>

まちにはさまざまな人がいて活動しているからこそ、多様な出来事が起こっている。まちはネタの宝庫だ。でも、だからこそ、ともすれば表面的な出来事にだけ反応してしまいがちになる。けれども、その奥にあるなにかを自分たちの言葉で探り当てて伝えていきたいと思うのだろう。その気持ち、すごくよくわかります。

（インタビュー：2025年9月18日）

## 自分とはバックグラウンド が違う人とかかわれるのは 楽しい

広尾の日本赤十字社総合福祉センター「レクロス広尾」のエントランスでは、毎月第1・3水曜日に、八百屋さんが届けてくれる新鮮な野菜を販売する「レクロスマーケット」が開催されている。ここには、近くの聖心女子大学の学生たちも授業のない空きコマに店番や会計などのお手伝いに来る。川崎さんは授業の空き時間だけでなく、休日でも予定が空いていれば来るそう。自分で時間を選択できることが無理なく続けられている理由の一つ。もともとボランティアに興味があり、大学もボランティアに力を入れている聖心女子大学を選んだ。子どもにかかわる教育ボランティアをしたことはあったが、「学校だけじゃない場所で地域のいろいろな年代の人とかかわってみたいな」と思ったのが、ここに来るようになったきっかけ。レクロスマーケットは、近隣の私たちも日赤の職員もたびたび利用する。「来てくだ

さる地域の方々も、「このお野菜は鮮度がいいのよ」「無農薬だからおいしいのよね」と言ってくれたり、レシピを教えていただいたり。福祉センターの利用者である高齢者の人たちとも、季節の野菜をきっかけに「昔はこうだったんだよ」とか「僕の生まれた地域の野菜だ」といった会話が生まれている。「短い時間ですけど、コミュニケーションが取れる瞬間は多いと思います。やっぱり自分とはバックグラウンドが違う人とかかわれるというのも、もう一つの続けられる理由かなと思います。楽しいんです。楽しくなければ来ないですよ（笑）」。

（インタビュー：2025年9月17日）



### 川崎文華さん

聖心女子大学2年生。大学での専攻は哲学。大学では聖歌隊にも所属。「聖心女子大学はボランティアサークルや、自発的に海外や僻地に行っただけじゃなく、むしろ私のほうがもっとやらないとな、って思ったりします（笑）」

### 吉澤ルミ子 (レクロスマーケット主宰) から見て

学生さんにとって一つでもなにか学んでいただけの場所になるといいなと考えています。助かったことはたくさんありますけど、学生さんがあまり売れない野菜の置き場所を変えてみたりポップを派手にしてみたりとか工夫したりしてくれる姿を見るとうれしいですね。

# 大学も応援しています!

渋谷区の地域活動に興味・関心を抱いている若者はたくさんいますが、なかなかその一歩を踏み出すチャンスがない……という若者の背中を押す存在として、大学もがんばっています。渋谷区地域活動にかかわる聖心女子大学、青山学院大学、東海大学の先生方に、地域と学生のかかわりについてうかがいました。

\*サービスラーニング——地域社会の諸課題を解決するための活動に参加する経験を授業内容に連結させ、市民性を育む学習のこと。

## 学生に地域へのさまざまな入り口を示したい

**秋元**——ボランティアや社会貢献活動をやったことはいずれも、自分もなにかやってみようという思いを持つ学生は多いです。自ら団体に連絡してなにか始めるのは勇気がいるけれども、サービスラーニング\*の科目を取れば、活動先や時間も決まっています。単位もつく。カリキュラムに則った学習の中で地域での

活動に参加できることが魅力で、サービスラーニングを履修する学生が増えています。

**遠藤**——そうですね。大学教育全体で見ると、やりたいけどきっかけがなかったという潜在層が増えてきている実感があります。社会の二員になりたい、社会の役に立ちたいという意識が強まってきている背景もありますし、ある種の自己実現——目的なく時間だけ浪費してお金ももらえるバイトなどではないことに価値を見いだして、時間と意識をコミットしていく——ことに、現代の若



**遠藤晃弘**

東海大学観光学部観光学科専任講師

**秋元みどり**

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター助教

**杉原真晃**

聖心女子大学現代教養学部教育学科教授

生に対応しています。加えて、食わず嫌いにどう食わすか(笑)。やっぱり「参加してみたら良かった」という経験をしてほしいなと思うんですよ。

**秋元**——地域活動に積極的な層に関しては、近年、高校時代に学校のプログラムでなにかしらのボランティア活動に参加してきた学生や、海外にホームステイや短期留学したことがある学生がすごく増えていると感じますね。そういう学生は、「大学に入ったらもう少し自分の関心のあるテーマでグループをつくってみたい」とか「助成金を取って活動を広げたい」「高校時代にやっていたことをもう少し発展させた活動をつくってみたい」とか、高校やそれまでの経験などが根っこにある人が多いですね。

**杉原**——うちの大学でも高校までにボランティアをやってきた学生が多いんですが、ある学生が言ったことが印象に残っているんですよ。「中学・高校までのボランティアは奉仕の色が強すぎて嫌だった」と。大学で先生の授業を聞いたらそうじゃないってことがわかって本当に良かったです。サービスラーニングの授業では、困っている人に「何かして差し上げる」のではなく、「お互い様だよ」とか「自分た



ちも参加することで何かを得られる」とか、双方ともにかかわる意味の形成を大事にしているんですが、学生はそういうところを求めているのかもしれないなと思います。

## 地域に求めるのは協働の関係性です

**遠藤**——「やりがい搾取」という言葉がキャッチーに流行りましたよね。実際、学生が地域に入っても、やったことのない駐車場の整備や誘導員とかを押し付けられてうまくいかなくて、怒鳴り散らされちゃった、なんてことは結構あるんです。バイトにもなっていない善意のボランティアだから、せめて「ありがとう」って言ってもらえるかなと思っていたらそうでもなかった、とかね。

いまの学生たちにとっては、「困っている人たちを助けます」じゃなくて、「自分たちも一生懸命になれる」ことがすごく大事なんです。ですから、協働の関係性をきちんとデザインしていくことが大切だと思っています。お互い同じ立場で、ともに問いに向かい合う時間を過ごさせていただく。特に学生はそこにとずっと住んでいるプレイヤーではないので、責任のあるかわり方のラインを学生たち自身も考えながら活動します。観光学科の私のゼミでは、学生たちを地域とかかわらせているのですが、観光というのは、いわば人が地域に行き帰るものであり、それを学問にするのが観光学です。「関係人口」と言われるように、その地にいる人たちだけではなく、来る人たちも一緒にあって、離れていても共感や時間、体験といったものを資源として循環させていくのが

**杉原**——本当にそうだと思います。もともと関心がある学生もいればそうじゃない学生もいるので、私たちとしては、ボランティアのチラシを掲示する入り口もあれば、サービスラーニングの授業という入り口も、学生ボランティア団体の入り口もある……というような、いろいろな入り口によって、多様な学

これからの観光だという気づきは、そうした関係性の中から初めて生まれてくると思うんです。そして、地域の方と協働させていたことと自分たちの専門性がどう結びつくのかを授業という出口で解説してあげる。そうやって二通り考えた経験がきつと彼らが生きていくそれぞれの道で力になるだろうなと思うし、そういうことができるプレイヤーが増えていけば、きっと日本はもっと良くなると思うんですよ。地域に求めるものは、協働の関係性だと思います。

**杉原**——関係人口を増やすことも大きな命題ですね。変な話、みんなデイズニerlandに行くけれども、デイズニerlandじゃなくて笹塚に行きたいっていう学生がいたらおもしろいわけです。その地にある生活文化を経験できて、もつと言えば、地元の人いろいろ相談にも乗ってくれるし、親身になって話を聞いてくれて人生の先輩としてアドバイスをくださる。これがサードプレイスの意味だと思うんです。親でもなく、学校でもない、近所でもないおばさんおじさんが親身になって聞いてくれる。そういう場所が増えると、そこへ行って自然と買い物をするし、お話ししたらご飯も食べる。そういう形で関係性ができた学生は、休みの日にわざわざ笹塚十号通り商店街のメロンパンを買いに行くんですよ。

**秋元**——地域からすると、「また似たような世代の似たような人たちが来て、同じようなことをして一時的に帰っていく」みたいな印象を持たれるのかもしれないですね。でも学生はとてもしんな刺激を受けていて、先輩や友だちから「サービスラーニングの授業がすごくおもしろかったって聞いたから、自分も取ってみたいです」というのが割と多いんですね。で

すから、学生がその地域で得ていることは地域の人々には見えてないけれども、学生自身の日常の中で共有し、また新しい学生につながっていくという動きは生まれているんです。学生に対して「ボランティアに来ただけから」と主体的に動いてほしい」とか、求める像はあるのかもしれませんが、彼らな



りにすごく刺激を受けて、それを友だちに共有して、またその友だちがいくというような状況はあるんです。一人の学生にできることは限られますが、鎖をつないでいくような形で学内や友人の中でつながって、あそここの地域に行ってみようと思うとか、活動があることを知るとか、ボランティアへのハードルが下がるとか、そういうふうになっているんです。それを地域でも温かく見守ってもらえるとうれしいな、彼らの小さな成長を受け止めていただけたらありがたいな、というふうに思っています。

### ともに市民を育てていくという気持ちでありたい

**杉原**——授業のプログラムとして地域活動に行った学生が、授業が終わっても継続して行っていると聞くと、本当の意味でつながった感じがしてうれしいなと思うんですよ。私は地域に学生をかかわらせる前に必ず自分が行って、地域団体との関係をつくってから学生を入れるんですが、基本的には地域の側からニーズがあった時に、「これをどう教育プログラムに落とせるか」をこちらでつくっていくんです。まずニーズありきで、そのニーズが学生にとって教育的にいかどうかを見極めるところから始まります。

**秋元**——私も授業が終わってからも活動を続けている学生がいるとうれしい。そう

は増えている印象があるんですが、サービスラーニングの提携先としては結構なコミュニケーションしないと難しいと思います。資格を取るための実習とも違うので、そもそも「授業でボランティアに来るって、なんなの？」ということに対する理解とかどこまで手間がかかるのかとか、なにを求められているのかを丁寧に話さないと、そうそう簡単には相手もわからないとあります。ミッションの中で、地域の市民を育てる」という観点を大事にされている団体は、学生の受け入れは自分たちのミッションを達成することにつながりますが、その観点がないと、目の前の課題が忙しくて人手も足りていない、なぜ学生の教育にかかわるの？という点がクリアになりにくいかなと思います。

**杉原**——そうですね。ニーズはいっぱいあるんですが、学生を受け入れる側の地域団体のスタッフの数も少ないですし、私やコーディネーターなど、大学から行ける人数にも限りがあります。ですから、いま私は、大学と連携することで学生を受け入れられる地域団体になっていくためのノウハウを地域の方々と一緒に作り、私も学生をどう指導すれば地



域の方々の負担が少なくなるかを学んでいこうとしています。地域によっても構成員によっても全然違うので一律でこうやればいいという方程式はないんです。秋元さんのようなコーディネーターの役割は、これから大学にもすごく必要になってくると思うんですよ。

**遠藤**——ゼミで遠隔地のフィールドに入るといこうとは、学生にとっては非日常かもしれないですね。ただ、時間を超えて、地域の人に「あの時来たあの子は元気ですか？」とか「この前家族連れてきたんだよね」とか言われると、その瞬間に、その地域にかかわった子たちの日常になる。特に限界集落では大学生の世代が一番いない。高校から地域を出ちゃう人が多いから。だから、学生が来るとすごくかわいがってくれる。地域の人たちと学生たちが一緒にあって、その地域のその先を描いていく過程そのものが、毎回うれしいんですよ。ハメを外す時もあるし、迷惑をかけちゃうこともあるんですけど、それも地域の人たちが引き出してくれた、学生たちの子どもらしい姿だったりする。調べたことや提案をほめられたら感激して泣いちゃったりするし、うまくいかなくて悔しくて泣くこともある。それは大学の教室の中では、体験できないことです。

**秋元**——いまほとんどの大学が地域連携を掲げていると思いますが、この不確実な時代に答えのない問題というものに若い人たちがどう向き合っているのか、それをどう教育の中で支えていくのか、それが大学が地域に出ていく一つの大きな意義だと思っています。どうしても大学の中だけでは、限られた価値観の中の「これがいいよね」が暗黙の了解に



いった学生が何人か出てくると、団体のほうも信頼を寄せてくれるんですよ。自分たちも人を育てている」という実感を得るといいますか……。そうすると関係も良くなりますし、私もやっていて良かったなっと思っています。やはり学生が行くとすれば、地域団体のほうにもそれなりに手間はかかります。でもやっぱり、そこからもう一歩膝を寄せ合う必要があって、私たちとしては、「どうしたらその団体にとって、より良い学生の活動を一緒に考えられそうか？」を団体と一緒に考えていくことが関係をつくっていくことなんだと思うんです。現場の方たちにも、団体として、学生を育てることに深くかかわったんだ」という実感を持っていただくのはすごく大きいことかなと思いますし、それは、私たちがその地域からどういう刺激や学びを得たかを地域にフィードバックしつつ、細く長く関係をつないでいく中の相互作用で生まれるものだと思います。

**杉原**——向こうも来てもらってありがたいし、こっちも良かったねって言ってもらえる、そういう機会が大事なんですよ。

**秋元**——学生ボランティアを期待されている団体になってしまふ。一方、地域に出れば、世代や立場の違いによって大事にしていることが違うということに初めて出会っていく。そうして、自分が大事にしていることって一体なんなのかな？という自分自身は社会とどう関係性を結んでいくのか？というふうな自分との対話が生まれる。それは人との対話の中でしか答えを出していけないんだ、ということを生体が得ていく。教室で学んでいることや先生が言っていることに対して批判的に考え、自分の中に真実を見いだしていく。そういうところに地域での学びの豊かさがあるんです。なにか課題を解決するといふより、一人ひとりがかけがえのない存在として地域とつながることを支えることが、教育機関としてすごく大事だと思っています。

（2025年10月27日／青山学院大学シビックエンゲージメントセンターにて収録）



**杉原真晃** | 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授。教育学。全学を対象とした「地域づくり演習」で、恵比寿、笹塚、幡ヶ谷などで学生たちが地域活動を実践して学ぶサービス・ラーニングの授業を展開。笹塚小学校での子どもたちの学習支援活動「ワクワク水曜塾」は青山学院大学と共同で実施している。



**秋元みどり** | 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター助教。社会福祉協議会や子どもテーブルなど地域福祉団体と連携してサービス・ラーニングの授業や、学生によるボランティアサークルの支援などを行う。シビックエンゲージメントセンターでは、学生が一人の市民として社会に主体的にかかわっていくことを後押しするプラットフォームとなることを目指している。



**遠藤晃弘** | 東海大学観光学部観光学科専任講師。観光学。観光の根幹と本質を考える力を育てるため、渋谷区をはじめ沖縄県、東北地方、長野県などをフィールドに、学生たちが地元の人々とともに地域の魅力や課題解決を考えていくゼミを行っている。

2020年5月、パンデミックの只中、イタリアで最も厳しいロックダウンが解除された直後、アレクサンドリア市ボルゴロヴェレート地区に、学生たちが自分たちのための居場所を開きました。それから5年。いま彼らはアレクサンドリアに根をはって活動を行う若者の団体「Yggdra(イグドラ)」として活動しています。創立メンバーのユーンネス・ファラさんに設立の経緯と現在の活動についてお話をうかがいました。



## 海外の若者たち

### イタリア・アレクサンドリア市の

# 若者団体「Yggdra」

最初は学生たちのための自習室から始まったと  
うかがっています。経緯をお話しいただけませんか？

ピアンカとステラという二人の女の子がコロナ禍中、近隣住民のためにSNSでいろいろなことを発信していたんです。5月になってイタリアで最も厳しいロックダウンが解除になって、多少距離は取らなきゃいけないけれども人々が集まれるようになった時にピアンカたちが「ここに場所があるけど、勉強しな

生やして、世界に枝を広げていくという意味を込めています。

活動としては実にいろいろありまして、例えば、駅前の公園がほったらかしになっていたので草刈りをしたり、公園の一角で子どもたちのためのイベントを開いたり、別の運動公園でスポーツのイベントを開催したり、年間だいたい44件、2025年は54件くらいの地域活動をしています。

ローカルな活動を大事にしているんですね。資金はどこから得ているんですか？

行政の仕事を受けているように見えると思います。行政からお金は一切もらっていないんです。なぜなら、アレクサンドリア市にお金がないから。資金は主に財団や地元企業からもらっています。公園整備

こない？」ってSNSで発信したんです。そうしたら、二三日のうちに30人も集まった。それまで自分たちが通っていた大学も図書館も、パブやバーなども全部利用できなくなってしまったし、トリノなど市外の大学に通う学生が戻ってきてても行くところがなくなってしまった。新しい場所が必要だったんです。

自習室は「スパツィオ・イグドラ」として現在でも  
存続していますが、その理由はなんだと思いますか？

のためにお金を出してくれた企業もあります。自分たちが企業と市役所の間に入ってつないだりもします。

どのくらいの若者が参加しているのでしょうか？

いま会員は190人くらい。入会金は10ユーロですけれど、スペースは会員でなくても利用できます。利用者は年間2000人くらいですね。給与を受け取っているのは2人で、他は全員ボランティアです。常時40人くらいの人がいろいろと自分ができることで貢献してくれています。例えば、エンジニアとか電気屋とか、コンピュータができるとかデザインできるとか……。

すでに地域で活動している団体の一部として若者支援をするのもできたと思うのですが、独自の団体をつくられたのはなぜですか？

僕たちは、アレクサンドリアの地域の人々を支援する「地区の家」にも所属していますが、「地区の家」はジェノバに母体がある大きな組織です。そういう組織では、例えば、大学とかにか提携してやろうという時に、なかなか自分たちで自由に機動力を持っていろいろやっていくのは難しい。自分たちの意志を尊重するために、自分たちで組織をつくらなくちゃならないと思ったんです。

自身は最年少の市議会議員でもあるとうかがいましたが、議員になったのはなぜですか？

自習室はふらりと入っても受け入れてくれるようなオープンな場。ここにはだいたい15〜30歳くらいの若い人たちのコミュニティができていて、大学生の間だけこのまちに来る人や高校を卒業したばかりの人にとっては友達たちをつくる場所だし、仕事も遊びも勉強もできる。コンサートや講演会もやっている。いろいろなかたちでみんなが使えるというのがいまも存続している大きな理由だと思っています。アレクサンドリアには行政がつくった若者対象のソーシャルセンターがありますが、そことは違って若者のコミュニティづくりに専念しているんです。

2023年6月に「Yggdra(イグドラ)」という団体になったわけですが、それはどういう経緯があったのですか？

僕たちがこういう活動をしていることに行政や企業や財団も気がついて、さまざまにチャンスが広がってきたんです。これはやらない手はないな、と。それで、社会的かつ文化的な若者の拠点というアイデンティティを固めたんです。「Paprin」とは北欧神話に出てくる世界樹の名前で、アレクサンドリアのボルゴロヴェレート地区に根を



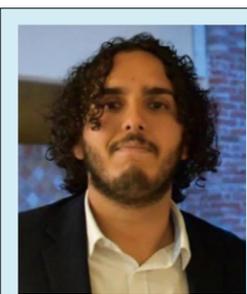
アレクサンドリア市内の公園など公共空間の整備や住民向けイベントの運営などの活動を行っている

イタリアの議員報酬はすごく安い(200ユーロ弱)約3万6000円/月)ので、僕のメインの仕事はイグドラです。イタリアというのは本当に若者にお金を使わない国なんです。イグドラはとても良い活動ですが、全体のシステムに影響をもたらすことはできません。システムに本当の改革をもたらすには中に入らなければ、と思ったんです。アレクサンドリア市議会には議員が35人いますが、30歳以下の議員は3人。その中で僕が一番若い。議員のうち10人を若者にするのが目標です。僕が少し道を開いて、後の人が続くことを願っています。

比喩的に言うとうと、アレクサンドリアはとても豊かな土壌を持っていて、いま種が蒔かれた状態だと思います。アレクサンドリアはいまいくつかわ良いプロジェクトが進行しているんです。8年以内に新しい大学のキャンパスができることになったし、病院もできる予定だし、改修で長らく閉鎖中だった市立劇場が2030年にはオープン予定です。すでに予算も下りているんですが、イタリアでよくあるのは、その予算がどこかに行ってしまうということなんです。これは正しく監視していかなきゃいけない。種もちゃんとケアしないと育ちませんから、一つひとつ、ちゃんと実現しないと、と思っています。



2020年に始まった自習室は、現在も「スパツィオ・イグドラ」として存続しており、多くの若者が訪れ、勉強したり、人と会ったり、講演会やイベントなどを楽しんだりしている。



ユーンネス・ファラ (Youness Farahat) さん

Yggdra(イグドラ)創設メンバーで、現在は総務を担当。アレクサンドリア市議会の最年少議員でもある。イグドラ <https://yggdra.eu>

# 地域で育ち、ふたたび地域へ

地域の中で育った子どもたちが大きくなって、地域を育てていく。そうした循環があちこちで生まれています。幼い頃に地域活動に参加し、いまはそれを支える側になった3組の方々に話を聞きました。そして、渋谷で進んでいる学校の部活動を地域にひらく試み、その先に目指していることについても紹介します。

だんだんと役目は変わったけど、ずっと生活の一部です



わたぬきけんた  
渡貫健太さん

生まれも育ちも渋谷区神宮前。現在は家族で中野区在住。システムエンジニアとして働きはじめて1年目。「遊び隊」では、子どもと楽しむプログラムの企画や運営のボランティアをしている。小中はバスケット部、大学では学祭の実行委員会に入り、「後輩の指導やまとめ役で、遊び隊での経験が生かされたと思いますね」と振り返る。

千駄ヶ谷地区を中心に活動する「子どもと一緒遊び隊」(以下、遊び隊)。小学生向けに工作や実験、キャンプなどのプログラムを行う団体で、1999年にはじまった。だいたい月に一回の週末が活動日。この日は千駄ヶ谷社会教育館の料理室での「大ちゃんの手づくりパン教室」だ。16人の小学生がエプロンと三角巾をつけ、4班に分かれてスタート。ボランティアスタッフは、いろいろな世代の大人が10人ほど。そのうちの一人、渡貫さんもエプロンと赤いバンダナ姿で「もつとぎゅうつとこねてみようか」「良い感じだね」と声をかけながら見守る。

渡貫さんは千駄ヶ谷小学校出身で、このエリアは「超地元」。自身は幼稚園児の頃から、年子の姉と一

緒に参加するようになった。「サマーキャンプが特に楽しかったですね」。毎年一回、30名を超える子どもたちが一緒に、高尾や檜原村にキャンプに行く。引っ張ってくれる年上のお兄さんお姉さんの姿が頼もしく見えたし、大人も楽しそうだった。「キャンプの参加は6までなのですが、純粹にまた行きたいなと思って、中学生からはスタッフとして参加しました。その年齢からボランティアに参加できる団体ってあまりないですよ」。

小学生の時とは異なる立場にやりがいもあり、高校生・大学生になるとだんだん企画を考えるようになっていく。遊び隊を続けてきた理由はなんなのだろう。「いちばんはやっぱり自分が楽しかったからです。子どもたちと一緒に楽しいことをやってみたいという趣旨に共感することが大きくて。徐々に役目が変わっていったことももう一つの理由。年齢が上がってできることが増えていくと、ちゃんとやりがいを与えてくれる。それで自分が満たされました」。時間をつくるのが難しかった時期もあったが、無理しているとは感じていない。渡貫さんにとって遊び隊の活動は、もう当たり前にある生活の一部となっているからだ。

社会人1年目のいまも、コンスタントに参加している。「活動の中で自分も成長して、それが結果的に地域のためになればいいな。かつて渡貫さんがそうだったように、きっと一緒に遊ぶ子どもたちにとって、渡貫さんは「ああいとお兄さんになってみたい」と思える存在になっていのではないだろうか。

インタビュー2025年10月26日



りょーまさん [左]

埼玉生まれ。プレーリーダー11年目。現在「えびすどろんこ山プレーパーク」に所属。そこを「業界一ゆるい場所にしたい」。

みつき〜さん [中]

渋谷生まれ渋谷育ち。プレーリーダー4年目。「はるプレ」所属。「だれがいつ来ても遊べる場所だともっと知ってもらいたい」。

あおきさん [右]

渋谷生まれ渋谷育ち。プレーリーダー7年目。「はるプレ」所属。居場所づくりに関心があり、「地域のいろいろなつながりがもってできていったらいいな」。

と三人は笑い合うが、背景は三者三様だ。りょーまさんは音楽の専門学校時代、アルバイト先のコンビニで当時のプレーリーダーと偶然再会。「飲みに行こうよ」と誘われ話すうちに募集を知り、「縁もあるしやってみるか」と飛び込み、もう11年。あおきさんは大学への通学に使う小田急線の車窓からはるプレが見えて懐かしくなり、立ち寄って見た。すると、中学時代に遊んでくれたプレーリーダーは自分を覚えていてくれた。そこから週末に参加するようになり、社会人になっても続いた。プレーリーダーにならないか、と誘われた時、会社を退職して引き受けた。

みつき〜さんは高校の単位制度をきっかけに「せせらぎ冒険遊び場」で限定ボランティアを経験。スタッフから「活動にかかわってくれてうれしい。これで終わりほさみしいね」と言われ、その後アルバイトを経てプレーリーダーに。

「子どもの頃はプレーリーダーがこんなにいろいろな考えを持った大人だったんだってわからなかったな。当時のプレーリーダーにいまから謝りたいくらい(笑)」とみつき〜さん。遊ぶのも仕事だけれど、子どもたちにも、周囲にも気を配る

のは大事な仕事。それでも「子どもの発想から生まれる遊びを共有できるのはおもしろい」(りょーまさん)。「地元出身の自分が『地域のお兄さん』としてここに

いることに意味があるかなって思うから続けます」(あおきさん)。

インタビュー2025年11月5日

僕たちが離れても、プレーパークはそこにあった。だから、また戻ってこられた

プレーリーダーの役割は、「子どもの遊びを広げること」と子どもの声を聞くことと、あおきさん。「友だちという対等な立場で、同じ人間」でいるのがいちばんいい」と、りょーまさん。

代々木公園にほど近い「渋谷はるのおがわプレーパーク」(以下、はるプレ)は、自由な外遊びの場。プレーリーダーはその環境ときっかけをつくる存在だ。子どもたちの遊びを見守り、大人もおしゃべりしやすい雰囲気をつくり、安全に気を配る。

現在のはるプレや他のプレーパークでプレーリーダーを務める三人はかつて、それぞれはるプレに通っていた。りょーまさんは小6で引越してきて学校にじめなかった頃、友だちに誘われて来てみた。「そこから週末常連」で、朝から夕方までずっといた。居心地が良かったんでしょね。あおきさんは中学時代、部活のない日に通学路を遠回りしてわざわざ来て友だちと遊んだ。「いたずらしても怒られない。ダイナミックな遊びができるのが、すごい楽しかった。みつき〜さんの初めてのはるプレは中1の時。そこにはプレーリーダーになりたてのりょーまさんがいた。しかし、だんだん学校や部活、ほかの遊びに忙しくなり、自然とはるプレから足が遠のいた。なのになぜプレーリーダーとしてふたたびはるプレとかかわることになったのだろう。「気づいたら、ここにいた」



明治神宮の森に毎年通い続けたから、変わるものと変わらないものが見えてくる



すぎやましりゅう  
杉山子竜さん

静岡生まれ静岡育ち。現在は神奈川県川崎市在住。4歳から高校生まで14年間、毎年明治神宮で開催されるシブヤ大学の授業「森をつくる。～明治神宮の森でどんぐり拾い～」に参加。大学生になってからは、NPO法人響の会員となり、先生側として授業を実施している。

原宿に広がる明治神宮の森。この森をフィールドに活動するNPO法人響は、日本の森や文化を考えるきっかけや気づきを提供するための自然学習を行っている。その一つに、明治神宮から特別許可を得て実施するどんぐり拾いがある。NPO法人シブヤ大学の授業では、響が先生となり、未来の森づくりに活用するどんぐりの種を拾いながら、森の歴史を学び、環境について考えてきた。杉山さんは4歳から毎年、この授業に参加するため静岡から通った。

幼い頃からトロロが大好きで、母に誘われ、一緒に参加したのが最初のきっかけ。「とにかくいろんな種類のどんぐりを拾うのが楽しくて、夢中でした」。毎年の1日を、明治神宮の森で朝から夕方まで過ごすのが恒例となった。

最初はどんぐり拾いに没頭するばかりだったが、徐々に自然への関心が深まっていく。小学生高学年の頃には、活動の意味を考えるようになり、自分の思いを伝えたいと、他の参加者に絵本の読み聞かせをはじめた。どんぐりや環境にまつわるものを、昼ごはんの後に朗読する。印象に残っている絵本は、『ハチドリ』のひとしずく。『いまの環境問題に通じるいい本だから、他の人にも知ってほしいと思ったんです』。さらに中学生の頃には、『どんぐり新聞』を自主制作し始める。響の授業での学びや明治神宮の森にまつわる記事をまとめ、クラスメイトに配った。「どんぐり拾いの活動は変わらず楽しく、そのなかで100年かけてこの森がつくられたことを知っていききました。毎年通い続けると、気候変動のため、どんぐりが落ちる時期が早まってきていることを実感

します。自分も森のためになにかしたいと、新聞をつくったんです。高校生からはスタッフとして、授業の参加者にどんぐりの拾い方を教えるようになった。「ここは自分にとって『第一の実家』ともいえる場所。普段の生活では大人とこうしてかかわることはないです。参加者は毎年入れ替わるけれど、響のスタッフは変わらず『また来たね』と毎年迎えてくれてうれしかったですね」。

授業では、どんぐりから芽吹いた苗を一人ひとりが持ち帰って育てる。杉山さんは、苗育ての名人でもある。最初は枯らせてしまうこともあったが、水やりや日の当て方を工夫し、苗に話しかけ、大事に育ててまた1年後に森に返すことを繰り返してきた。

大学卒業後、現在は神奈川県に住む。生活は変わったが思いは変わらず、できる限り森づくりに参加してきたいと話す。「明治神宮の森がこの場所にあることは、世界中を見ても本当に貴重。この先もつないでいくため、自分にできることをしていきたい。いま課題だと思っているのが、同じ思いを持っている同世代や下の世代とつながることです。たとえ近隣に住んでいなくても、地域から学び、かわり続けるかたちがある。杉山さんは明治神宮の森でそれを積み重ねてきたのだ。(インタビュー)2025年10月27日

## 部活がまちに開いたら？

もし、部活がまちの中でできたらどうだろう？

部活に地域の人に参加したらどうだろう？

もしかしたら、子どもたちは自然とまちとつながっていくのではないのでしょうか？

部活動を学校内で閉じるのではなく、まちに開く取り組みを主導する、

渋谷区スポーツ協会理事の田丸尚穂さんにかがいました。

あそこのアイスおいしいよねって見えるような、地域の人が参加してくれたい

田丸さんたちが行っている、部活動を地域に開く試みとはどのようなものなのでしょうか？

「部活動改革」って聞いたことありますか。2021年からスポーツ庁が本格的に進めている、学校の部活動を地域で支えていこうという取り組みです。忙しい学校の先生たちの働き方改革が発端で、いま全国的な動きになっています。渋谷区はそのトップランナーの立場で、渋谷区スポーツ協会が公立中学校の部活動の専門的な指導者や運営を担うマネジメント人材を配置しています。その制度設計や人材がどう地域で循環していくのかを考えながら、部活動改革という名前の、いわば新しい渋谷のまちづくりをやっています。

とはいえ、いきなり全てを変えるのではなく、2023年度に2校をモデル校として始めました。渋谷区には8つの公立中学校があり、毎年2校ずつ増やし、順調にいけば2026年度には全ての部活動を学校外の方たちで回していく土台ができます。



たまるなほとし  
田丸尚穂さん

一般財団法人渋谷区スポーツ協会専務理事。渋谷区教育委員会教育委員。出版社にてスポーツ誌などの編集職を経て渡米。フロリダ州立大学大学院スポーツマネジメント修士課程修了。IMGアカデミー・アジア地区代表を経て、帰国後博士号(スポーツウエルネス学)取得。現在は、自治体、学校などと連携しながら部活動改革に取り組んでいる。

具体的にどんなことをしているのですか？

部活動の指導人材を先生から地域の方に変えようとしています。指導だけでなく、安全管理や場所の管理などもひっくるめて、いま外部人材がやり始めています。全国調査によると、担当している部活動の競技経験あるいは指導経験がある先生は50%程度しかない。また、異動もあるので同じ先生が教え続けるのはなかなか難しく、それは子どもたちにとってデメリットだと思います。我々が配置している専門的な人材は基本的に異動もなく、指導経験があったり、コーチングの講習会を毎月行って指導の質を担保したりしています。子どもたちを意識調査をしたところ、専門的な指導を受けられて上達を実感できる満足度が大きいようです。

また、部活動のシステム自体を変えていくには運営マネジメント人材が重要だと考えているので、「クラブマネージャー」や「スーパーバイザー」の役割を置いています。生徒たちの細かなケアや先生方との連携、保護者への情報発信をする人材です。今後はそういう役割も、地域の方にやっていただきたいと考えています。

### コミュニティと子どもがもつとつながるように

地域の人は、競技を指導するだけではないかわり方もできるのです。地域の人が担う部分は具体的にどのようなことでしょうか。

部活動には、指導以外のマネジメント業務が結構あります。その競技のスキルがなくてもできる可能

### 渋谷のまち中がクラブ活動場所「シブヤユニテッド」



代代木公園で、ブレイキンやダブルダッチなどを行うストリートスポーツクラブ



地域交流ラウンジ「笹塚アキチ!ツナガルラウンジ」で活動するeスポーツクラブ

学校ではできなかったスポーツや文化活動に参加できる地域クラブ。現在、ダンス、フェンシング、ボウリング、ポッチャ、デジタルクリエイティブ、eスポーツ、将棋、料理・スイーツ、ストリートスポーツ、アニメ・声優などのほか、2026年度には種目がさらに拡充し、渋谷区内のさまざまな場所での活動が広がっていく。



性がある。僕は博士論文の介入研究として、強豪校の野球部のコミュニティにかかわったことがあります。僕は野球の素人でしたが、野球を知らないからこそ、心理的安全性のよいうなものを子どもたちに与えられていた

側面がありました。例えば、子どもたちが怪我をした時、「練習を休んでしまうと、レギュラーにならないかもしれない」と指導者にはなかなか言い出しづらいけれど、素人の僕には悩みを吐露しやすいという状況が生まれたんですね。

部活動研究では、指導者一人に対して子どもたちがたくさんいる一対多の閉じられた環境になるので、権威主義になりがちだという課題が指摘されています。そういう意味でも、指導以外でかわってくれる地域人材が大事だと考えているんですね。競技のスキルはなくても地元を知っていて「あそこアイスおいしいよね」と話をしてくれるような、安心して話せる人がいたらいいと思う。子どもたちとの接点がほしいとか、コミュニティに属したいと考えている人が地域サポーターになってくれたらうれしいですね。

部活動改革プロジェクトには、もう一つ、学校の枠を超えた地域クラブ「シブヤユニテッド」が

業者になっています。活動場所もいろいろで、ダンスクラブのように中学校の体育館を使うこともあるし、2025年に立ち上げたストリートスポーツクラブは、岸体育館跡地の代代木公園で活動しています。

### 教育環境を考えることは、まちの未来をつくること

学校の枠を超えたいことは、地域で子どもを育てることもありますね。

従来の部活動の仕組みだと、その学校にアクセスしにくい人には途端に文化活動や運動活動が閉ざされてしまう。学校に全てがそろって完結しているがゆえに、そこから外れると機会がなくなってしまう。部活動が地域に開いたオープンな場所になる良さは、そこにもあるんじゃないかな。

一方、日本の学校の部活動の仕組みが本当に悪いのかというと、そうではない。学校にこれだけの体育施設がある国はなかなかありません。アメリカ型でもヨーロッパ型でもない、日本独自の地域スポーツの在り方を目指すことができるはず。学校も地域のコミュニティの一つだとすれば、その施設を活用できれば、まさしく地域とのつながりを持つ場所になるのかなと思いますけどね。もちろん、セキュリティなどいろいろな課題はあるんですけど、部活動改革をコミュニティを再興する良いきっかけとして捉えると、学校って本当に可能性がある。

部活動の目的は、それぞれの子どもによるので、選択肢をあげたいと思います。部活動を渋谷全部のスポーツクラブと考えれば全校にサッカー部は

### 新しい部活動を支え、地域のハブとなるマネジメント人材



学校の教室などを活用した「ユニテッドルーム」はマネージャーと指導者が研修を実施するほか、教員とも交流し、情報交換を行うコミュニケーションスペースとなっている

渋谷区の部活動改革では、各校にクラブマネージャーとそれを統括するスーパーバイザーというマネジメント人材を配置している。生徒や保護者、指導者、教員をつなぐハブ的な存在だ。現在は、渋谷区スポーツ協会の職員らが担当しているが、今後は、こうした役割を地域の人々になってもらうことも見据えて取り組んでいる。

あります。これはどんな取り組みですか？

渋谷で暮らす子どもにとって多様性があり、「学校にはないクラブ活動をやってみよう」という声も多かったです。そこで2021年に「シブヤユニテッド」を立ち上げました。学校の部活動にはないユニークな地域クラブとして、区内在住であれば、通う学校問わず入部できます。

ここでは地域のリソースを活用していて、例えばデジタルクリエイティブクラブはMIXI、将棋クラブは将棋連盟、料理・スイーツマスタークラブは服部学園など、渋谷に拠点がある企業や団体が支援する必要があります。ある必要はないでしょうし、このエリアは大会上位を目指すけれど、こちらはとにかくボールを蹴る楽しさがいざばんと、メリハリができる。子どもたちが所属する学校にとどまらず、どこでも選べる「動的」なクラブ活動ができる可能性が、日本の学校にはあります。

地域が子どもを育み、コミュニティも育んでいくという目的が、部活動改革の根底にあるのです。子どもたちの教育環境を変えることは、将来のまちを変えることだと思っています。いま中学生なら十年後はこのまちを牽引するリーダーになる年代になっているでしょうから。

教育において子どもたちの「主体性」がとても大事だと言われています。ただ、主体性は自己完結できるものではなくて、たとえば哲学者の西田幾多郎や精神病理学者の木村敏などの言葉を自分なりに要約すると、他者や環境との絶え間ない動的な関係性によって主体が形づくられていく。であれば、部活動改革の向かう先も、子どもたちの主体性が育まれるような、人や環境とかわかれる場づくりになれば良いなと考えています。

### 地域人材募集



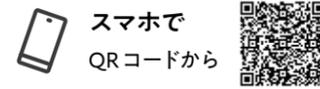
## お便りお待ちしております！

今号の『渋カツナビ』はいかがでしたか？

これからも渋谷の未来を動かすたくさんの方のローカルアクションを応援していくので、ぜひともご意見・ご感想・ご提案などをお寄せください。

楽しかったこと、失敗したこと、“あるある”など、なんでも結構です。

みなさんからのお便りをお待ちしています！



スマホで  
QRコードから



郵送で

〒150-8010 渋谷区宇田川町1-1 渋谷区役所 地域振興課

バックナンバー



渋カツナビ 2024  
特集:私の地域デビュー

PDFはこちらから  
ダウンロードできます。



渋カツナビ 2025  
特集:まちの居場所って  
なんだろう？

e-bookでも  
お読みいただけます。



PDFはこちらから  
ダウンロードできます。



## 取材を終えて

- 若者たちの話の中に「家（ホーム）」という言葉が何回も出てきました。その言葉の中には、癒されたとかほっとするというような安心感があるようでした。それは人と人の間に存在する普遍的な価値なんだと改めて感じます。(紫牟田)
- 取材の場で、みなさんがそれぞれ自分の言葉で話してくれたことが印象に残っています。そのままの姿が伝わればと、編集しました。自分と違う世代と本音で話すのは少し勇気があることですが、一歩踏み出せばそこには思いがけない発見があります。(玉木)
- 誰かが隣にいて、自分のことを見ていてくれる、それだけで子どもたちは安心してきているように思えた。大人になって、ずっと歳をとっていても、誰かが気にかけてくれていると思えたら、例えそれが家族じゃなくても、安心してそこにいることができるんじゃないだろうか。そのような活動をされている方々に多く会えてとてもうれしかったです。(橋本)
- 今号で紹介された方々の写真からは、心地よい風に吹かれているような清々しさを感じます。軽やかに、朗らかに、真剣に、そして自分らしいやり方で、活動しているからでしょう。これから渋谷のまちに、もっといい風が吹きそうです。楽しみ！(阿部)

## 渋カツナビ 2026

発行	渋谷区役所
発行日	2026年3月15日
制作	渋谷区役所区民部地域振興課
企画	一般社団法人マネージング・ノンプロフィット (左京泰明、加藤房秀)
編集	株式会社 Future Research Institute (紫牟田伸子、玉木裕希)
取材・文	紫牟田伸子 (p6~23) 玉木裕希 (p24~29)
通訳	多木陽介 (p22~23)
デザイン	阿部太一 (TAICHI ABE DESIGN INC.) + 田村京太
撮影	橋本貴雄、かとうはるひ (p25、30)
表紙イラスト	加納徳博

# ローカルアクションのコツ 若者と地域編

取材した若者たちは、口々に「楽しい」とか「いろいろな人に会えて癒やされる」と語ってくれました。生まれ育った場所とは違うけれど、「実家みたい」とか「第二のホーム」と感じる人もいます。みなさんのお話から、若者と地域のかかわり方のコツをまとめてみました。

## 身近な入り口を見つけよう

大学には授業やゼミ、サークル、ボランティアセンターなど、地域とかかわりたいと思った人に開かれている入り口がたくさんあるみたい。活動している先輩や友人の話の聞いたり、一緒に参加してみるのもいいかもしれませんね。興味のある活動を直接訪ねてみるのもよいと思います。

## できる時間でやってみよう

授業の合間や空き時間などに気軽に行けるのが地域活動の良いところ。もちろん参加する団体の人たちと話し合った上で、無理なく楽しくやりましょう。

## 心地良かったら続けてみよう

学校や職場では出会わない人たちと出会えるのが地域。机上の勉強も大事だけれど、心地良い交流ができるようなら、ぜひ続けてみて。そこで出会った人たちと、例えば学校生活や仕事のことなど、たまには活動以外の話もしてみたらどうでしょう。思わぬヒントが見つかるかも。

## 多様な価値観と触れ合おう

多様な人々の価値観を知ることができるのも地域の魅力。その活動を始めた人のもともとの動機に触れてみよう。意味や想いがわかると目の前の活動がもっと楽しくなるかも。お互い違う価値観に寄り添い合いつつ、高め合うことができれば素敵です。

## まちを楽しもう

地域の人たちと知り合うと、それまで見えていなかったまちの魅力を発見することにもつながるみたい。あいさつする人が増えたり、おいしいお店を発見したり、草むしりをしたくなったり(笑)……新しくなにかに挑戦する気分も高まるかもしれません。